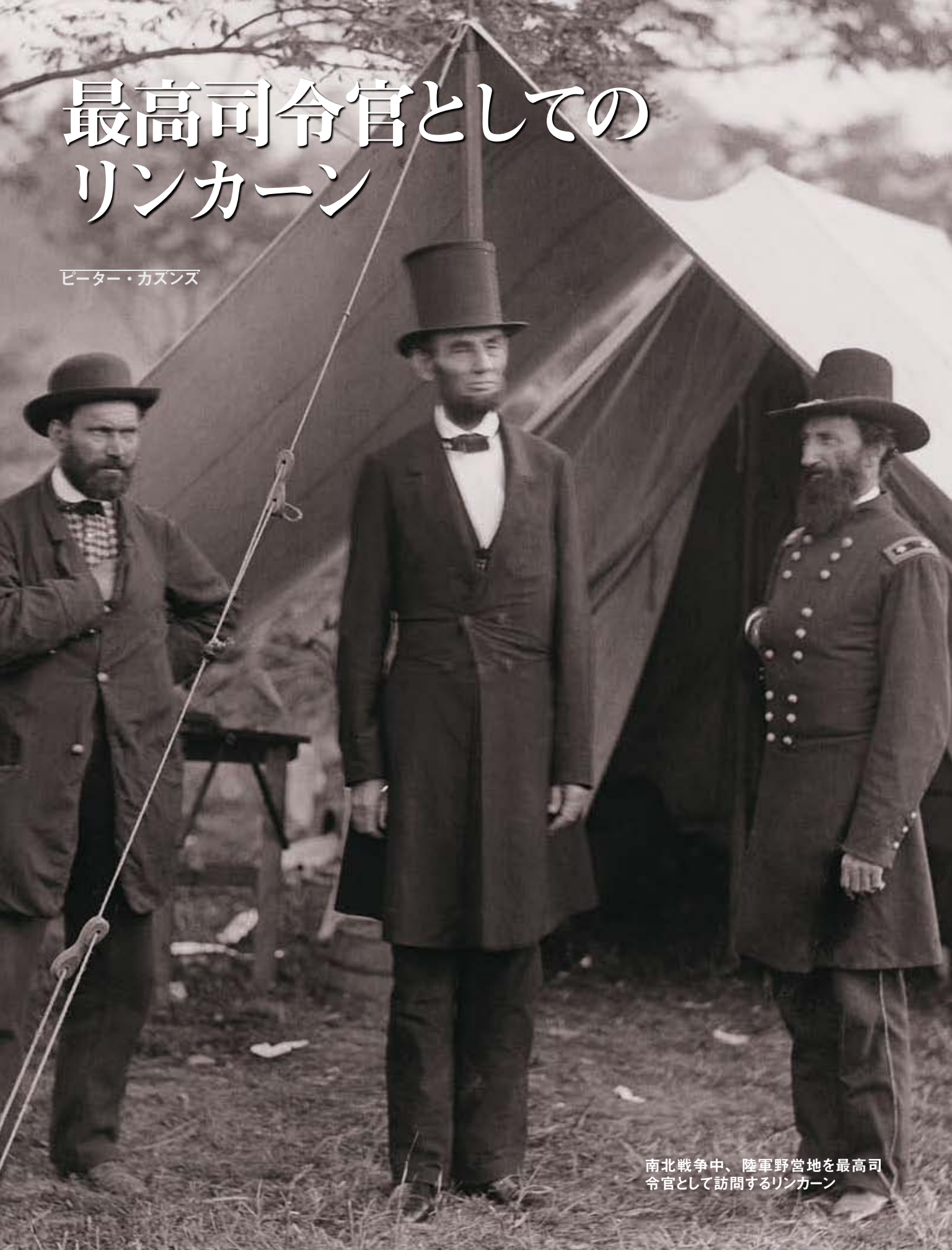
# 最高司令官としてのリンカーン

ピーター・カズンズ



南北戦争中、陸軍野営地を最高司令官として訪問するリンカーン

南北戦争末期のある日、ひとりの軍高官がホワイトハウスを訪れ、同僚の将軍２人が野営地外で女性の友人を訪問中に、敵軍に捕えられたとリンカーン大統領に報告した。将軍とともに、数百頭の馬とラバが奪われた。リンカーンはこう応じた。「准将のことはあまり心配していない。わたしが新たに任命すればよいのだから。しかし、馬とラバの補充には金が掛かる」

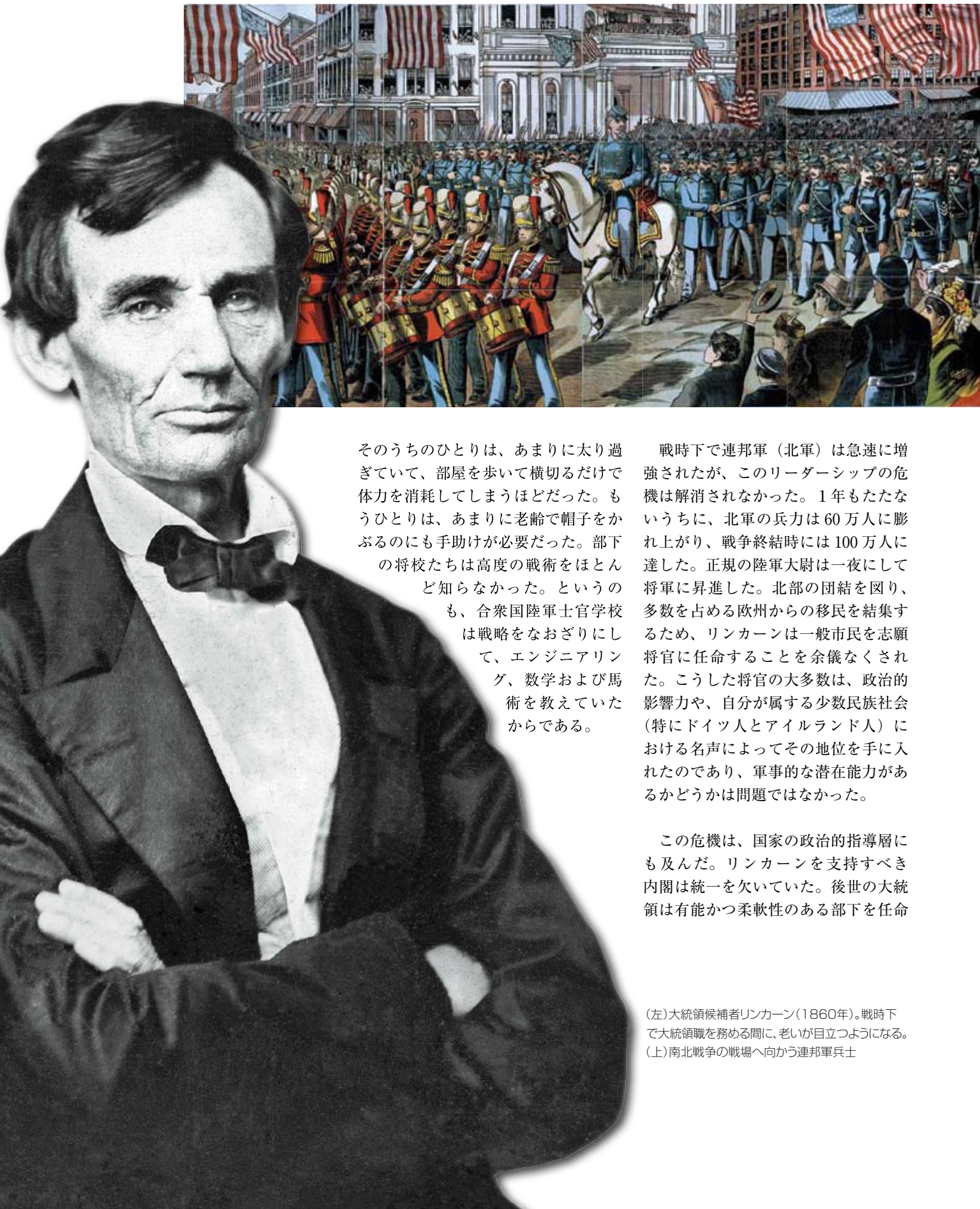
「米国が外部から滅ぼされることは決してない。もしわれわれが行き詰まり、自由を失うことがあるとすれば、それはわれわれが自分自身を滅したからだ」

この冗談には、凡庸な将軍たちや、３年にわたってほとんどひとりで戦争遂行の課題に取り組まなければならなかったことに対する長い間の焦燥感から生じた、リンカーンの苦い思いが込められていた。

米国の南北戦争は最初の近代的な総力戦であった。すなわち、欧米における戦争の伝統であった軍隊と軍隊の間の戦いであるばかりでなく、社会と社会、そしてそれぞれが持つ経済資源、生活様式そのものの戦いであった。

エイブラハム・リンカーンは、30年前に義勇兵団の歩兵中隊隊長として小規模なインディアン戦争に参加した以外には、軍事訓練を受けたことも軍隊経験もないまま大統領に就任した。リンカーンが1861年３月に引き継いだ常備軍の兵力は１万6000人で、大西洋岸からカリフォルニアに至る広範な地域の駐屯地に分散していた。リンカーンには、助言を求めたり、野戦指揮官に対する指示を効果的に伝達したりするための近代的な軍事司令システムがなかった。就任１ヵ月後に戦争が起きたとき、参謀となる幕僚はおらず、２人いた陸軍大将も旅団以上の規模の部隊の指揮経験はまったくなかった。

サウスカロライナ州のサムター要塞（中央）が南部連合軍の砲撃を受けた後、戦いに志願する北部の愛国心的市民。連邦議会議事堂のドームが見えるが、実際にはまだ完成していなかった。



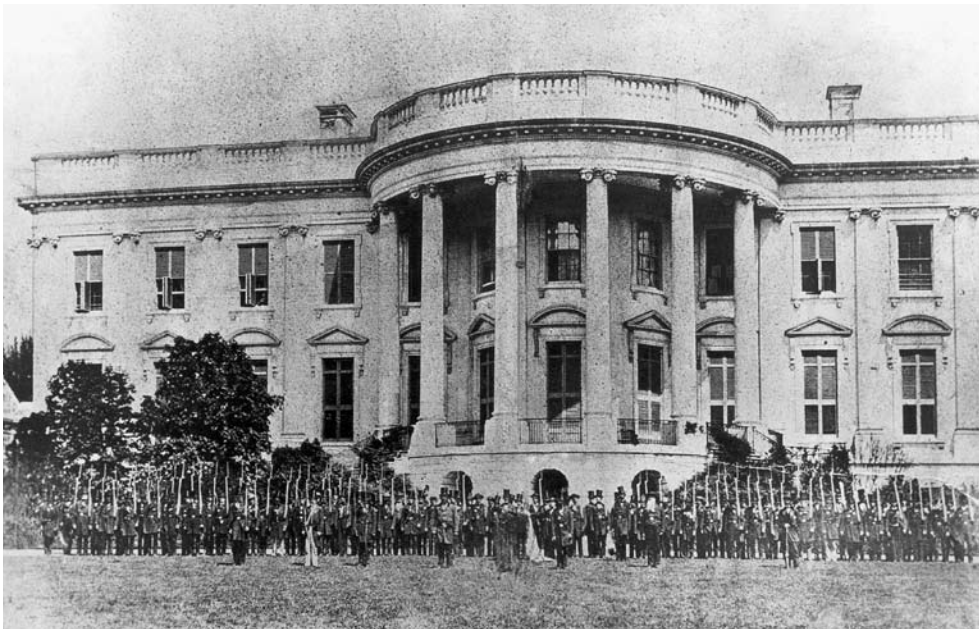
そのうちのひとりは、あまりに太り過ぎていて、部屋を歩いて横切るだけで体力を消耗してしまうほどだった。もうひとりは、あまりに老齢で帽子をかぶるのにも手助けが必要だった。部下の将校たちは高度の戦術をほとんど知らなかった。というのも、合衆国陸軍士官学校は戦略をなおざりにして、エンジニアリング、数学および馬術を教えていたからである。

戦時下で連邦軍（北軍）は急速に増強されたが、このリーダーシップの危機は解消されなかった。1年もたたないうちに、北軍の兵力は60万人に膨れ上がり、戦争終結時には100万人に達した。正規の陸軍大尉は一夜にして将軍に昇進した。北部の団結を図り、多数を占める欧州からの移民を結集するため、リンカーンは一般市民を志願将官に任命することを余儀なくされた。こうした将官の大多数は、政治的影響力や、自分が属する少数民族社会（特にドイツ人とアイルランド人）における名声によってその地位を手に入れたのであり、軍事的な潜在能力があるかどうかは問題ではなかった。

この危機は、国家の政治的指導層にも及んだ。リンカーンを支持すべき内閣は統一を欠いていた。後世の大統領は有能かつ柔軟性のある部下を任命

（左）大統領候補者リンカーン（1860年）。戦時下で大統領職を務める間に、老いが目立つようになる。
（上）南北戦争の戦場へ向かう連邦軍兵士

することができるようになったが、当時の慣習や政治的現実の下では、リンカーンは全国的に知られた頑固な政治家を閣僚に任命せざるを得なかった。そうした閣僚の中には、共和党大統領候補指名争いで大方の予想を裏切ってリンカーンに敗れた国務長官のウィリアム・H・スワード、共和党創設者のひとりで将来の大統領を自任する財務長官のサーモン・P・チェイス、民主党員で弁護士時代に重要な裁判でリンカーンを負かしたことのある陸軍長官のエドウィン・M・スタントンがいた。南北戦争開始当初、彼らはいずれも自分の方が知的な面でリンカーンより優れており、内戦の荒波の中での国家という船のかじ取りについても、リンカーンより有能とは言わないまでも同様の能力を持っていると考えていた。



ホワイトハウス前に集結する連邦軍部隊

## 無能力な将軍たちからの挑戦

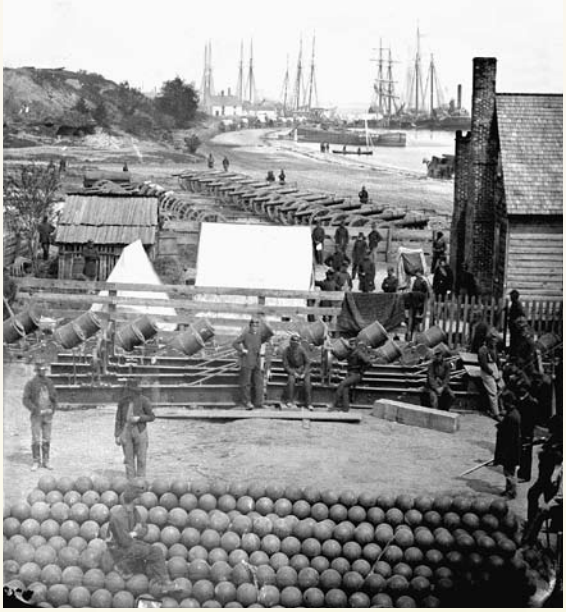
こうしたマイナス要因があったにもかかわらず、リンカーンは自らが持つ知力と人格の力によって、卓越した戦略家となった。リンカーンは、北軍部隊を指揮する多数の将軍の誰よりも内戦の本質と目的をよく把握しており、この点ではユリシーズ・S・グラント将軍も例外ではなかった。リンカーンは最初から、北軍の圧倒的な海軍力の価値を認識しており、南部連合を締め付けるために海軍力を容赦なく使い、南部にとって国際的価値のある唯一の商品である綿花の輸出と、南部側が必要とする武器などの軍需品の欧州からの輸入を阻止するため、南部の港湾を封鎖した。彼はまた、南部を２つに分断するためにミシシッピ川を奪取することの重要性と、南部連合の戦略線全体に圧力を加え続けることが必要なことを理解していた。後者は、グラント将軍が1864年３月に北軍総司令官に就任するまでは、リンカーンの下にある将軍たちが、どうしても実行できないでいたことだった。将軍たちは常に、北部側の人的資源および生産能力における優位を十分に生かすことに失敗し、それがリンカーンにとっては絶え間ないいら立ちの種となった。

リンカーンは、中途半端なやり方はあり得ないこと、すなわち、国家の統一と奴隷解放の問題は、それらが二度と蒸し返されることのないようなやり方でのみ解決が可能であると考えていた。そのためには、南部連合軍と南部側の戦闘能力を共に完全に破壊する必要があった。

戦争が長引く中で、リンカーンは自らの再選を危険にさらしながら、数十人の無能な政治的将軍を軍から排除した。戦う意欲のある司令官のみを求め、有能な将軍を発見したと考えたときには、進んで自らの戦略上の判断を放棄した。しかし、それと引き換えに彼が直面したのは、将軍たちの度重なる無為、決断や行動の遅れ、弁解だった。ジョージ・H・マクレラン少将は、戦争の最初の１年半の間最も人気が高かった司令官で、部下から強い崇拝を受けていたが、リンカーンは彼を「ぐずぐず病」にかかっているとして解任した。戦場での勝利を決定的にするための追撃をためらう臆病な将軍たちに対しても、同様の当然ともいえるいら立ちを示した。戦争開始後の３年間、北軍の司令官にはいずれもこうした欠点が見られたのは北部側にとっては不運なことだった。

リンカーンは、自らが持つ最高司令官の権限に対しても内部からの挑戦を受けた。今日ではもちろん、軍部に対する絶対的な文民統制の原則が一般的に認められているが、リンカーンの就任当時はそうではなかった。米国の創設以来、陸軍の司令官は政治的な問題について判断を下すことを認められていた。これは上位者に対する不服従を認めるという一種の旗印であり、メキシコとの戦争ではあまり悪影響は出なかったが、南北戦争のような国の存続を懸けた戦いにおいては、国家の骨組を脅かしかねないものだった。

リンカーンがマクレランを司令官の職から解任すると、ポトマック軍内のマクレラン配下の将軍たちは、南部連合に対する戦いを放棄してワシントンへ進軍し、大統領の退任を迫ることを検討した。1863年４月になって、決定的に重要なこのポトマック軍の司令官ジョセフ・フッカー少将は、大統領制を軍事独裁制に切り替えることを提唱した。リンカーンは慎重ながらも毅然とした対応を取った。フッカーは、チャンセラーズビルの戦いで敵軍の２倍を上回る兵力を持ちながら敗れたため司令官を解任された後、自分の政治的な大言壮語に対する大統領の反応が



南北戦争による米国人死傷者数は、第２次大戦を除くと、これまでの戦争で最も多かった。また南北戦争の死傷率は第２次大戦を大幅に上回った。
上の列左から右へ：ベンチの後ろに立って、ジョージ・G・ミード将軍が持った地図を調べるユリシーズ・S・グラント将軍、バージニア州ヨークタウンの連邦軍兵器補給所、連合軍のジョン・フッド将軍の部隊に物資を補給する線路を破壊する連邦軍部隊、戦争の第一弾となった連合軍によるサウスカロライナ州チャールストンのサムター要塞への砲撃
下の列左から右へ：南北戦争では、数十年後の第１次大戦中に一般的になった塹壕（ざんごう）戦が、すでに行われている。写真は、バージニア州ピーターズバーグ近くの連邦軍の塹壕と、戦争がサムター要塞で始まってから４年後、廃墟となったチャールストンの一部

（上）ジョージ・B・マクレラン将軍。リンカーンに連邦軍司令官の職を解任され、1864年の大統領選挙にリンカーンの対立候補として挑戦したが、落選した。
（左）リンカーンの闘志あふれる将軍、ユリシーズ・S・グラント。周りの絵は、同将軍の経歴をその出番となった場面を描くことによって綴ったもの。連合軍降伏の場面が中央下にある。

いかに抑制の利いたものであったか、また軍事問題に関するリンカーンの助言がいかに賢明なものであったかに気付いた。リンカーンは思いやりのある父親が放蕩息子に接するように自分を扱ってくれたと、フッカーは涙を浮かべながら同僚の将軍たちに語った。

## 感情の変化

1864年の大統領選挙までには、一般の兵士もリンカーンの戦略的リーダーシップの偉大さを認識するようになっていた。彼らの圧倒的な支持票を集めて、リンカーンはジョージ・B・マクレランに対する勝利を確かなものした。この元将軍は、リンカーンに解任された後、民主党の大統領候補として浮上し、地域的和解の提唱者として、リンカーンの政治的ビジョンに異議を唱える急先鋒となっていた。

マクレランからリンカーン支持へという軍人感情の変化は、どんなに強調してもし過ぎることはないほど重要な意味を持っている。リンカーンはようやく彼のために戦う将軍としてユリシーズ・S・グラント将軍を見いだしていた。この将軍は荒削りな性格の司令官だったが、北部側の人材および資源における実質的な優位性を最大限利用するというリンカーンの決意に賛成していた。グラントの総司令官としての在任期間の最初の1ヵ月半の間に、ポトマック軍は5万5000人の死傷者を出した。シェナンドー渓谷の戦いにおける決定的勝利およびジョージア州アトランタの占領は、軍事戦線全体に容赦なく圧力をかけるというリンカーンの構想が実を結んだものであり、最終的な勝利へ向けての希望が生まれた。

しかし、南部側は降伏の気配を見せなかった。グラント将軍の優れた指揮能力とリンカーンの同時攻撃戦略は、バージニア州ピーターズバーグにおけるロバート・E・リー将軍の部隊に対

1865 年4月9日、バージニア州のアポマトックス・コートハウスで、連合軍のロバート·E·リー将軍（右）がユリシーズ・S・グラント将軍に降伏し、南北戦争は終わった。

する包囲戦で、悲惨な状態に陥り、厳しい試練にさらされていた。西部戦域（アパラチア山脈とミシシッピ川の間の地域）では、弱体化したものの依然として手ごわい南軍が動き回り、ミシシッピ川の西では、まだその真価を問われたことのない南軍の部隊がルイジアナ州とテキサス州を押さえていた。1864 年のリンカーンの大統領再選は、決着が着くまで戦争を遂行しようという国民的合意を示すものであった。

２期目の大統領として政治的に安定したリンカーンは、不人気だった１期目と同様の堅固な目的意識を持って物事をやり通した。信頼できるグラント将軍を総司令官に任命したことにより、リンカーンにかかっていた絶え間ない圧力は大幅に緩和され、日々の作戦行動を安心してグラントに任せることができるようになった。しかし、グラントが下した決定であっても、リンカーンはその決定の正しさについて疑問を感じると、厳しい質問を浴びせた。

## 再統合への道

1865 年 4 月の第 1 週、ようやく最終的な勝利が見えてきた。かつては無敵とも思われたリー将軍が指揮する北部バージニア軍の残存部隊の大部分を壊滅させた後、フィリップ・H・シェリダン少将はグラントに対し「このまま事を押し進めれば、リーは降伏すると思う」と打電した。

グラントはシェリダンからの報告をリンカーンに伝えた。大統領はグラントに「このまま事を押し進めるように」と命令した。これがリンカーンの発した最後の重要な命令となったが、それは彼が発した命令のほとんどと同様に適切な命令であった。この命令を出した３日後、リンカーンは暗殺者の銃弾に倒れて亡くなった。合衆国は最も偉大な戦時の大統領と、生まれながらの偉大な戦略家を失った。しかし、ほかのどんな要素にも増して、彼の戦略的ビジョンと揺るぎない目的意識が南北戦争を勝利に導き、米国の再統合への道を開いたのである。

**ピーター・カズンズ**は米国国務省の外務局職員であり、優れた軍事史家でもある。南北戦争および米国西部のインディアン戦争に関する 16 冊の著作は高く評価されている。